

新たな視点からのステイラマティ研究

代表 佐久間秀範（筑波大学教授）

瑜伽行唯識思想の論師として有名なステイラマティに帰せられる諸論書の内容を吟味してゆくと、これまで中国の『大唐西域記』『慈恩伝』などを基礎に描かれたステイラマティ像や中国唯識教学・日本法相教学の描く安慧像と異なる人物像が浮かび上がってくる。そこで従来のステイラマティ像をいったん白紙に戻し、現存する文献そのものの提示する思想内容から、註釈家ステイラマティの人物像を再吟味する必要性を見いだした。代表者は科学研究費基盤研究 B の共同研究としてテーマ別に四つの班を編制した。研究の一環として昨年『仏教学』第 55 号（2013）に「註釈家ステイラマティは一人か？」として問題を提起し、今回は各班ごとに発表者を立ててパネルを企画した。

発表 1：佐久間秀範「インド瑜伽行唯識思想におけるステイラマティ」

ここでは上記内容の趣旨説明を行い、このパネルと 9 月 27 日（土）に佐久間秀範、Martin Delhey, Jowita Kramer, 吉村誠、伊藤康裕のメンバーでさらに内容を深めたシンポジウムを行う内容を紹介し、共同研究の途中経過を公表した。

そこで新たなステイラマティ研究の視点として代表者は（1）修行者の視点を中心に、文献の提示する思想内容の歴史的変遷を辿る指標として（1-1）実践理論から（1-2）教義理論へという扱い方を提唱し、おおむね出席者の賛意を得た。

発表 2：箕浦暁雄（大谷大学准教授）「ステイラマティ『俱舍論実義疏』梵文写本から得られる知見」

ステイラマティの『俱舍論実義疏』の解説は、これまでの『俱舍論』理解に再検討を促す。それはまた、仏教思想史の上にステイラマティを再定位することにもなる。『俱舍論』を著したヴァスバンドゥを、サンガバドラの『順正理論』が批判し、サンガバドラをステイラマティの『俱舍論実義疏』が批判する。アビダルマ研究の領域でこう了解されてきた三者の関係を再検討する必要がある。ステイラマティは『順正理論』を批判対象として見るだけでなく、『俱舍論』註解のために積極的に参照する。また、ステイラマティはヤショーミトラと異なった『俱舍論』理解を示す箇所がある。『俱舍論実義疏』梵文写本解説によって、これらの点がより明確になる。そして、中国・日本の俱舍学の伝承と比較することで、我々が得てきた思想家ステイラマティ像は、時代をへて、より典型的に捉えられてきたことを示した。思想家像が、何によって方向付けられ、限定されてきたか、その要因を暴き出すことの重要性を指摘した。

発表 3：橘川智昭（東洋大学東洋学研究所客員研究員）「東アジア唯識教学における安慧——唯識思想の系譜論と安慧像——」

唯識思想の系譜問題として、安慧を真諦系であるとか、『起信論』の真如随縁に応同するもの、あるいは護法に比してインド唯識につながるとする説明が通例

なされてきた。結城令聞氏がすでに指摘したように（結城『華嚴思想』（結城令聞著作選集 2，春秋社，1999，pp. 469-484：初出，仏教史学会編『仏教の歴史と文化』同朋舎，1980）），それは明治以後顕著に行われ，江戸時代の普寂（1707-1781）・戒定（1750-1805）の所論に端を発する。今回は普寂と戒定の特質と相違点を整理した。両者は華嚴の教判の大乗始教と終教との関係の中に唯識の系譜を考える。普寂は行布に重きを置き，護法＝始教／安慧＝従始向終／『起信論』＝終教と考え，戒定は，護法＝権／安慧＝実と配し，包括的に『起信論』で統一を試みた。いずれもインド唯識に『起信論』的意義を模索し，玄奘以後に非をみようとする態度の中に系譜論が展開される。

発表 4：早島慧（京都産業大学研究員）「『大乘中観釈論』研究の本格始動に向けて」

本発表ではステイラマティによる『中論頌』の注釈書，『大乘中観釈論』研究の本格始動にあたって，過去の研究成果を整理し，今後の方針を提起した。主な先行研究として，月輪賢隆氏，梶山雄一氏，江島恵教氏による論考が挙げられる。これらの諸研究はステイラマティ釈とブッダパーリタ釈・バーヴィヴェーカ釈とを詳細に比較検討し，ステイラマティ釈と両釈との密接な影響関係を明らかにした。しかし，これらは注釈間の関係性のみに注目し，『大乘中観釈論』独自の思想，あるいはその著述意図を考察することはなかった。本発表では，先行研究の問題点を整理し，比較検討を行うとともに，『大乘中観釈論』を単独で読み進める重要性を指摘し，この点をふまえた今後の研究方針を提起した。

発表に対するコメンテーターの発言 師茂樹（花園大学准教授）

本共同研究の意義を確認した後，①方法論的課題と②漢字文献の取り扱いについて発表者に対し意見を求めた。①については，文献ごとに異なる態度を見せる「註釈家」ステイラマティの分析には，仏教学が前提とする思想的・一貫性を持つ人物像（「思想家」）とは異なる見方が必要なのではないか，と述べた。また Kramer が「修行をあまりせず，註釈に時間を費やす」ステイラマティ像を提示していることを紹介した。②については，玄奘訳がインド文献との比較のなかで再評価されていることをふまえ，玄奘に近い時代の文献と日本の文献とは扱いを分ける必要があるのではないか，と問題提起をした。

本コメントの後，来聴者も含めた活発なディスカッションが行われた。